

論点整理ペーパー及び農薬専門調査会体制

(平成 30 年 4 月農薬専門調査会決定)

	頁
農薬専門調査会体制（平成 30 年 4 月農薬専門調査会決定）	1

【参考】

（部会で ADI 等が決定し幹事会へ報告する農薬）

インピルフルキサム	2
-----------------	---

農薬専門調査会体制(平成30年4月農薬専門調査会決定)



※: 専門参考人

インピルフルキサム

諮問理由	化学構造	作用機序	用途	評価資料
<ul style="list-style-type: none"> ・新規登録 ・魚介類への残留基準値の設定 	—	ミトコンドリア内膜に存在するコハク酸脱水素酵素からユビキノンへの電子伝達を阻害する。	殺菌剤	<ul style="list-style-type: none"> ・試験成績の概要及び考察 ・試験成績報告書

【試験成績の概要】

1. ラットを用いた動物体内運命試験の結果、吸収率は少なくとも 95.3%であり、投与後 72 時間にほとんどの放射能が尿及び糞中に排泄された。残留放射能濃度は、消化管、肝臓及び腎臓に高く認められたが、投与 168 時間後には顕著に低下した。未変化のインピルフルキサムは糞中に少量認められ、尿及び胆汁中では検出されなかった。尿、糞及び胆汁中に代謝物 J、L、M 及び N 並びに I、K 及び O のグルクロン酸抱合体のほか、I を含む多くの代謝物が認められた。臓器及び組織中には未変化のインピルフルキサムのほか、A、B、I、J、K、O 等の代謝物が認められた。
2. 畜産動物（ヤギ及びニワトリ）を用いた体内運命試験の結果、可食部において未変化のインピルフルキサムのほか、10%TRR を超える代謝物として F、I、I のグルクロン酸抱合体、I の硫酸抱合体及び J が認められた。
3. 植物体内運命試験の結果、未変化のインピルフルキサムのほか、10%TRR を超える代謝物として B、E、E の抱合体、F、I、I の糖抱合体及び J の抱合体が認められた。
4. 各種毒性試験結果から、インピルフルキサム投与による影響は、主に体重（増加抑制）及び肝臓（び慢性肝細胞肥大等）に認められた。発がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性及び遺伝毒性は認められなかった。